

巻 頭 言

「セルフヘルプ・グループを考える」

宇田川 芳江

協会ニュースを低料第三種郵便物として発送するためには、送付用封筒の肩半分をハサミで切り、中身が見える状態にする必要がある。封筒は職員が月初めに宛名の印刷をしておいてくれるので、メール対応などのスキマ時間 30 分ぐらいでその作業をやっている。ハサミでジョキジョキと封筒の肩を切り落とす作業は、けっこうストレス解消にもなる。単純作業ではあるが、その日の心のありようがもろにハサミの先に出てしまう。気持ちに余裕がないときは切りすぎたり、デコボコになったり散々になってしまう。

封筒に印刷されている会員のお名前を目にしなが、いろいろなことを考える。昭和の終わりから平成の初め頃にかけて、東京都中途失聴・難聴者手話講習会で一緒に、修了後は一度もお目にかかる機会がないまま、ずっと長い間会員でいてくださっている方がおられる。お元気でいらっしゃるだろうか。昔、活発に専門部の活動をされ、今はお会いする機会がないが、会員を続けてくださっている方、要約筆記者として活躍され、登録を降りられた後も協会応援団として会員継続してくださっている方、一人ひとりのお顔を思い浮かべながら、懐かしい気持ちで作業する。コミュニケーション関係の講習会スタッフや受講中の方、通訳者のお名前も多い。その他賛助会員の個人の方、病院、会社の封筒もある。単純作業とはいいいながら、協会のカタチと向き合う時間でもある。

33 年前、東京都立大学が南大沢に移転したとき開講した都民カレッジで、「セルフヘルプ・グループを考える」という講座を受講した。このときの学びは協会の存在意義を真剣に考えるきっかけになった。協会を外から客観的に分析して見る視点を養うことができた。講師を担当された故久保紘章先生は慈愛に満ちた方だった。私に対しても対等に接して下さり嬉しかった。

講座の内容で特に印象に残ったのは、セルフヘルプ・グループに共通にみられる、5つの特徴だった。①人間同士の感情の解放と支え合い、②メンバーが成長する、③モデルとなる人に出会う、④役に立つ情報が得られる、⑤社会に向けて働きかける。今もなお、この5つの重みはズシンと胸にくる。協会がセルフヘルプ・グループとしてよりよく機能するための憲章ともいえるかもしれない。5月26日に行われた通常総会でも、この5つの役割を果たす必要性を突き付けられるようなご意見を頂戴した。心して臨んでいきたい。